

# パーキンソン病とパーキンソン症候群

今回は脳神経内科で日本神経学会指導医・専門医の野元正弘医師に「パーキンソン病とパーキンソン症候群」について伺いました。



▲野元 正弘 医師

減少が早まった状態といえます。治療により動作は改善してほぼ普通の業務や生活ができます。治療にはアミノ酸に似たレボドパを使います。レボドパは効きますが、すぐに分解排泄されるので、長持ちするアゴニストやレボドパの持続を延長させるマオ阻害薬やコムト阻害薬も使っています。高血圧症などと同時に生涯治療を行いますが、寿命は他の方とほとんど変わりませ

運動と栄養を十分に行うことで病気の進行を防ぐことができます。

パーキンソン症候群はパーキンソン病に類似した症状を起こすほかの病気を指しています。核上性麻痺、多系統萎縮症、大脳皮質基底核変性症はパーキンソン病関連疾患と呼んでいます。血管性パーキンソン症候群は小さな脳梗塞を繰り返すと起こり、脳室が大きくなっているときには正常水頭症の可能性を検討します。特別な疾患は無く加齢のみ

パーキンソン病は手足の震えや動かしにくさ、歩きにくさが起こり、転びやすくなる病気で、60歳以上の方で多く見られますが、若い方にも起こります。大脳と小脳の間にある中脳黒質のドパミン神経が減少して発症します。ドパミン細胞は加齢で減少しますが、パーキンソン病は

気が丁寧治療して、

行の起こる例もあります（senile gait 高齢者歩行と呼びます）。それぞれの状態に応じて治療します。なお、運動療法（リハビリテーション）は病院で練習して生活の中で毎日行うことが大事です。

社会福祉法人



恩賜財団 済生会今治病院

今治市喜田村7丁目1番6号

<https://www.imabari.saiseikai.or.jp/>

☎0898-47-2500

